

白鳥の

飛羽山松の 待ちつつそ

わが恋ひわたる この月ごろを

(笠郎女 卷四・五八八)

『万葉集』には、笠郎女が家持に贈った恋歌が29首掲載されていますが、家持が返したであろう歌はほとんど残っていません。

今日8月24日は、若山牧水の誕生日です。酒と旅を愛した歌人として知られ、長男に旅人と名付けたのは『万葉集』の影響かと思われ、印象に残っています。宮崎県出身の私としては同郷の歌人としても馴染み深く、代表歌のひとつである「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まず

ただよふ(『海の声』所収)は、とくに好きな歌です。その歌の初出時に「白鳥」とあったのを、歌集に収載する際に「白鳥」と修正したところが知られています。ハクチョウでは種類が限定されますが、シラトリとは白い鳥全般を指し、想像力をよび喚起してくれるた

やまと
万葉がたり

めであったかといわれます。

『万葉集』にも「白鳥」を詠んだ歌があります。表題の歌は、笠郎女が大伴家持に贈った歌の中の1首です。漢字本文でも「白鳥」と記されており、シラトリと訓読する説もありますが、『常陸国風土記』香島郡白鳥里条に「志漏

止利」とかな書きさら「飛羽山」という地例があり、平安名にかかり、さらに「白鳥の飛羽山松の」で同名の「待つ」を導き出す表現となっています。この幾月かあなたを待ちつつ恋い続けた、とつれない恋人を待ちわびる女性の嘆きが詠まれています。

【訳】白鳥の飛ぶ飛羽山の山松のように、あなたを待ち続けて長く恋してきました。この幾月かを。

か)

(県立万葉文化館企画・研究係長・井上さや